関係者各位

Press Release

2026年11月吉日
株式会社山田養蜂場
https://www.3838.com

第10回 山田養蜂場「植樹祭」、130名で2,500本を植樹
15万本超の苗木が育む、生命息づく森を次の世代へ
～森の成長とともに広がる、CO_2吸収と生物多様性保全への取り組み～

株式会社山田養蜂場（本社：岡山県苫田郡鏡野町、代表取締役社長：山田英生）は、2026年11月21日（土）、岡山県鏡野町にて、鏡野町および津山市教育委員会の後援のもと、第10回 山田養蜂場「植樹祭」を開催しました。

当日は、地域の皆さまや親子連れなど 130 名が参加し、アラカシ、ヤマザクラ、ソヨゴなど、その土地本来の樹種を中心に2,500本の苗木を植樹しました。

「自然との共生」をコンセプトとする山田養蜂場では、地球温暖化や環境破壊が進む中、豊かな自然環境を守り、次の世代へつないでいくことを自らのミッションと捉え、1999 年から植樹活動を続けています。国内で開催してきた植樹祭では、これまでに15万本以上の苗木を植えてきました。





■130名とともに2,500本を植樹、第10回の節目を迎えた「植樹祭」

第10回という節目を迎えた今回も、故・宮脇昭氏が提唱する「宮脇式植樹」を取り入れ、参加者一人ひとりが苗木を植えました。宮脇式植樹は、その土地本来のさまざまな樹種を混ぜて密に植える手法で、当社では「本物の森」をつくるため、長年にわたりこの方法を続けています。

会場では、土の感触を楽しみながら笑顔を見せる子どもたちや、家族で協力しながら苗木を植える姿が見られました。土に触れ、自らの手で一本の苗木を植える体験を通して、自然を大切にする気持ちと、未来の環境のために自ら行動することの大切さを、世代を超えて共有する一日となりました。

■親から子へ。植樹祭とともに育った森を、次の世代へ

今回の参加者の中には、第 1 回の植樹祭にも参加した社員の姿がありました。当時は若手社員として参加していましたが、その後は時に家族と共に、また時には海外でも植樹活動を続けてきたといいます。かつて自らの手で植えた小さな苗木は、歳月を重ね、今では見上げるほどの木々が生い茂る森へと成長しました。長い年月の中で森が育ち、自身も親となったことで、活動に込める想いにも変化が生まれたと語ります。



「第 1 回に参加したときは、『未来の子どもたちのために木を植える』という想いはまだ漠然としたものでした。しかし、自分にも子どもが生まれたことで、次の世代に豊かな自然を残す大切さを強く実感するようになりました。今日、参加者の皆さんと植えた苗木も、いつか大きな木となり、その先の世代へとつながっていくことを願っています。」

人が木を植え、木々が森をつくり、その森がさまざまな生命を育む。当社の植樹祭は、木を植えるだけでなく、自然を大切にする想いや体験を、親から子へ、そして次の世代へとつないでいく場にもなっています。

【メディアお問い合わせ先】
株式会社山田養蜂場 文化広報室 樋上（ts0975@yamada-bee.com）黒田（sk0752@yamada-bee.com）
〒708-0393 岡山県苫田郡鏡野町市場194 TEL：0868-54-1906 FAX：0868-54-3346

アピセラピーを追究する。
山田養蜂場
YAMADA BEE FARM

■第 10 回を迎えて　代表取締役社長 山田英生 コメント



「養蜂は、ミツバチが受粉することで周辺の自然環境を豊かにしてくれることから、人とミツバチと自然環境の三者が共に栄えることのできる特別な仕事です。私たち人間は、元々自然の中から生まれてきたものであり、豊かな自然環境が無ければ生きていくことはできません。

しかし、人類の生存基盤である地球環境がいま危機に瀕しているため、私たちは未来の子どもたちに豊かな自然を残そうと 20 年以上植樹を続けています。師である植物生態学者　故・宮脇昭先生の「宮脇方式」を用い、その土地固有の木々を密植・混植することで、本来数百年かかると言われている自然林の再生を数十年で実現しています。

自然回復の最適な手段であるこの植樹を世界に広げることが私たちの使命と考え、これまでに国内外で 241 万本の植樹に取り組んできました。今後も日本に、世界に、自然再生の活動を展開してまいります。」

■15 万本超の苗木が、多様な生き物が暮らす森へ～ネイチャーポジティブの実現に向けて～



国内で行ってきた植樹祭では、これまでに 15 万本以上、約 5.1 ヘクタールにわたり苗木を植えてきました。第１回植樹祭では、世界的な植物生態学者であり、森づくりの第一人者である故・宮脇昭氏の指導のもと、17,328 本の苗木を植樹。当時の小さな苗木は年月を重ね、枝葉を大きく広げる森へと成長し、今では 20m を超える木も見られるまでになりました。

木々の成長とともに、そこに暮らす生き物にも変化が生まれています。かつて植樹した地では、現在タヌキやキジバトをはじめとする生き物が確認されています。木々がつくる木陰や落ち葉、花や実などが、さまざまな生き物の餌場やすみかとなり、かつて人の手で植えた苗木が、多様な生命を育む森へと成長しています。

生物多様性の損失を食い止め、自然を回復軌道に乗せる「ネイチャーポジティブ（自然再興）」の実現が求められる中、一本の苗木を植えることから、森を育て、そこに新たな生命が集まる山田養蜂場の森づくりは、ネイチャーポジティブの実現にもつながる取り組みへと育っています。

■育った森は、環境保全にも貢献

森林は大気中の CO_2 を吸収し、炭素として蓄える役割も担うほか、雨水を地中に蓄え、ゆっくりと流出させる働きや、土壌を守る働きなど、さまざまな環境保全機能があります。

「何本の木を植えたか」だけではなく、「植えた木がどのような森となり、どのような生命を育んでいるのか」。

これまで続けてきた植樹活動は、一本一本の苗木を植える活動から、地域の生物多様性や豊かな自然環境を支える森づくりへと広がっています。

山田養蜂場では、1999 年から国内外で植樹活動を続け、2026 年11月 21 日時点で累計 2,417,871 本を植樹してきました。一本の苗木から、森へ。森から、さまざまな生命へ。山田養蜂場はこれからも「ひとりの人のために」という想いを、一人ひとりの行動へ、そして一本一本の木から森へとつなぎながら、「未来へと生命をつなぐ森づくり」を続けてまいります。